



〈中国学 わたしの一冊〉 『新華字典』 随想

佐藤, 進

(Citation)

未名, 30:59-77

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481805>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481805>



〈中国学 わたしの一冊〉

『新華字典』随想

佐藤進

一、はじめに

筆者は中国古典語学を専攻し、漢代の古字書『釈名』『方言』などに関するささやかな研究に従事するかたわら、漢和辞典『全訳 漢辞海』（三省堂）の編集・執筆にたずさわっている。それだけに、中国や日本の漢字字典には絶えず関心を払うことしてきた。いや、関心を払うというよりは、むしろ字書マニアに近い性癖があると正直に言っておくべきであろう。そういう癖のある筆者が、大学で中国語の学習を始め、そのうち中国語の研究に従事するようになってほぼ四十五年、その間ずっと手元において引き続けた字典は『新華字典』である。本稿はその『新華字典』について気ままな筆を執ったもので、実証的な論文などではない。つまり、しかるべき識者がすでに立論してしまった事柄について今さらながらに言及することがある。実証的な立論をなさる方は、本稿ではなくそうした先行研究を参照なさるようお願いしたい。

『新華字典』は一九五三年の初版刊行以来、今日までの累計発行部数が四億冊に達するという（『人民日報』二〇一一年八月一三日の記事を転載したネットニュースによる）。ちなみに中国の出版史上最大の発行部数を誇るのは、いうまでもなく『毛主席語録』である。ある試算によると、一九六六年三月から一九七六年八月までに六五億冊が刊行されたという（矢吹晋『毛沢東と周恩来』講談社現代新書、一九九一年）。それには及ぶべくもないが、『人

『民日報』の記事によれば『新華字典』は、辞書では世界最高の発行部数を誇るという。

二、『新華字典』との出会い

まず、『新華字典』との出会いをお話しするべきであろう。大学で中国語の授業が始まると、たいいていの先生方は辞書を紹介してくれる。筆者が東京都立大学の教室で教わった慶谷壽信先生も何種類かを紹介してくださいました。そのなかに『新華字典』も含まれていたように記憶するが、何といつても中字典は敷居が高い。先生の紹介するなかから筆者が選んだのは香坂順一・太田辰夫編『現代 中日辞典』（光生館）であった。これはあつと言う間に表紙がはずれてしまうほど引き込んだ。

あらためて『新華字典』に注目したのは、二年生になって竹内実先生の授業に出ているときであった。二年生では、竹内先生に中級中国語で許地山『春桃』を教わり、文学講読で『儒林外史』を教わった（ただし二学期が始まると学園紛争のために授業のすべては立ち消えになる）。竹内先生の声調幅の広い発音で読まれる中国語は、今でもはつきり耳に残っている。それで、竹内先生はいつも教科書とともに小さな字典を持って教室に來られたのである。どういうきっかけであったかは覚えていないが、ある時、教卓においてあるその小さな字典の書名を知ることができた。それが『新華字典』であった。

そのころ、中国で流通していたのは一九六五年に刊行された第四版であったはずだが、日本の書店で購入できて、筆者が手にしたのは一九六二年七月第三版の十七次印刷平装本である。見出し字が教科書体の太字で見やすい感じがしたが、紙が厚めであるせいかゴロンとした束があるわりにペラペラの表紙で、竹内先生の机上の『新華字典』のように小粋な感じはしなかった。ただ、ともかくも自分の『新華字典』が手元にあることがうれしくて、語釈を

読む実力はなかったけれども、さし絵をながめて外国の零囲気を味わっていた。本格的に引くようになったのは筆者が一九七二年に大学院に進学してからで、そのころ一九七一年の修訂第一版が入手できるようになったからである。それについては第四節でふれたい。

ただ、文化大革命以前の『新華字典』については、中国においてはいざ知らず、日本の中国語界ではあまり評価が高くなかったようである。以下に引くのは『中国語学事典』（中国語学研究会編、一九五八年）の解題である。

☆新華字典

新華辞書社編、一九五三年新華書店刊。A 6 版本文七〇〇頁、横組。

小学教師や初中学生程度を対象に、独立しうる単音詞と、意義上分解しえない複音詞（徘徊・琵琶・布爾什維克の類）計六千五百余条を、漢字單位に注音符號順に排列したもの。辞典の歴史からいえば、文字中心の立場から詞中心へと移行する最初の萌芽ともいえるし、語音そのたに多少の新味もあつて、近來時に云々されるが、依然漢字を基にして排列し、語数も少ないしわれわれの實際の利用価値からみれば、そう大したものとも思えない。詞單位のものでは、倉石・ラテン化新文字中国辞典の光彩陸離たるに、本書は遠く及ばない。卷末に筆形部首檢字法があるが煩瑣で役に立たぬ。一九五四年には修正増補された部首画数排列の版が出ている。

（近藤春雄・村尾力）

中国語辞典のあるべき姿が字典から詞典へと移りつつある時期の評価であることを差し引いても、評価が不当に低いように思われる。ここで我々は『新華字典』のそもそもの成り立ちを知っておく必要がある。

三、『新華字典』の成り立ち

この字典の成り立ちについては、周祖謨に「伍記」と『新華字典』という題名のエッセイがある（『辞書研究』一九八三年三期、いま『周祖謨語文論集』河北教育出版社、一九八九年による）。興味深い内容なので、以下にその全文を訳出する。

我々の当代最も通行する小型字典は『新華字典』である。この字典の編纂計画と体例の制定に関しては、一段の物語がある。それはここで述べたい「伍記」のことである。

話はその発端からするべきだろう。抗日戦争に勝利したあと、一九四六年の秋、たくさんの先生方が相前後して北京に返ってきて、集まって顔を合わせる機会がだんだん多くなってきた。戦乱のあとで会するものだから、大変楽しく、話しても尽きないのであった。同時にまた、八年というあいだ、世の中が緊迫して落ち着かなく、あつと言う間に過ぎ去ってしまったことに深く感じ入ったのだが、今や文化教育の事業については確実に有意義なことができるようになった。

あるとき、魏建功先生のお席であったが、お酒の後で小中学校教育の問題に話が及び、ついでに字典の問題に発展した。字典というものは知識の開発や文化の向上に対して極めて大きな重要性があるので、時代の要求に合致する新型の字典を編まねばなるまいと痛切に感じたのである。そのころの我々が言うところの新型、その意図は、従来ともすれば文字を重視し、言語と文字の関係を重視しない欠陥を取り除くということにあった。この意図にもとづいて、試しに小型の字典を編集して小中学生に使わせようと思ったのである。我々はこの仕事は教育の普及に有益であり、ひとつの事業として努力せねばなるまいと判断した。話しているうちにま

るで新しい試験作業が始まるかのように思えてきた。けっこう興奮してきた。もしも本当にこの方面に貢献ができるなら、それはとても愉快なことだ。

やるとなれば、まずさらに幾人かの同業者と編集の体例や関連する問題などを議論しなければならぬ。そこで魏先生は金克木・呉曉鈴・張建木先生と私をさそって、魏先生のお宅で意見の交換をした。第一回目の集まりは星期五（訳者注…金曜日）であった。ちよつと話し始めると午前中まるごとかかった。何人かはみな字典の編集は絶対に必要なので、まず小さいのを編集し、それから拡大して中型のものを編集するのにかまわなと考えた。この一日で話した範囲はとも広く、収録字や注音や語釈、それから配列方法など、それぞれに構想を提出した。みな大変に関心が濃厚で、毎週金曜日の午前中に魏先生のお宅で具体的な問題をひとつひとつ討論していくことに決めた。五月の北京の陽気はすでに暑くなつてきていた。我々四人はみな時間どおりにやつてきて、一度も休むことなく、二ヶ月あまりを続けたのであった。

魏先生の住まいは北京朝陽門内の東四牌楼大街にあつたが、通りの幅はとも広かつた。東四牌から東に行くと朝陽門に至る。その道沿いの歩道には肉魚野菜や日用雑貨を売るマーケットになつており、毎日、午前中には人の声があやがやとやかましく、売り歩きや座商などが行列をなすようであつた。その中には、引越しや運送などを業とするものがあり、二三人で一台の大人車を路肩にとめて客待ちしているのだが、その仕事を「脚行」と名づけていた。たとえば王さんであれば、「王記脚行（訳者注…王印運送）」という看板を掲げている。我々五人が字典を作るとしたら、どういう名前にしたらいいだろうか。その時代には「小組」などという言い方はなかつた。恐らく魏先生が門の外に「王記脚行」の名前があることに思い至つたのであろう。「ああ！我々五人なら『伍記（訳者注…五人印）』じゃないですか。我々の字典は『伍記小字典』と名づけるのがいい

ですよ」と笑いながら言った。もちろんそれはジョークだったのではあるが、その「伍記」がのちの『新華字典』と関係を持つことになったのである。

我々「伍記」のメンバーはみな言語学を研究するものであるので、二言三言話しても本業を離れることはない。魏先生は大先輩であるから、我々年若いものたちはみな魏先生といっしょに学問を論ずるのがうれしかった。字典を編むために幾度かの討論を経たのち、とりあえず数条の凡例を制定した。

(1) 以前に出された小字典はすべて『康熙字典』の二一四部首に従って配列されており、ただ『国音常用字彙』のみが注音字母のウタ口ㄘㄨㄤ順に配列されている。我々が新しく一冊編むとすれば、必ず音序の配列法を採用し、別に部首索引をつけることにする。部首も少し変えてかまわない。

(2) 収録字は、現在の常用の程度を根拠に考えると、五千字から六千字の間が妥当。いくつかの連綿語は、ひとつの見出しとして出す。その二番目の字は「参照」方式を採用して表示する。発音は『国音常用字彙』を基準とする。

(3) 語釈関係の問題はけっこう多い。我々はいくつかの原則を確認した。①語釈は口語体を用い、意味は明確に書くべきで、できるだけ互訓の方法を使わないこと。②多義語については通常の意味を前におき、常用でないものは後におくこと。③語釈の後には例をあげるが、常用のことばを語釈の後にならべるようにする。それは単語であつてもよいし、成語やフレーズであつてもよい。あるものは文法と関連づけて語釈をおこなうこと。④ことばの語釈が語義発展の問題にかかわることがある。ある種の語義は早期の語義から派生してできたものであり、あるものは比喻からできたものである。語義の記述に「派生義」や「比喻義」と明記してもよい。それ以外にも、特殊な状況から産み出された語義があり、その場合には「転義」の名称を立ててもかまわ

ないこと。これは清朝人が訓詁を講じるときに常用した言い方でもある。

(4) 小中学生が字の書き方を学びやすいように、見出しには、活字体ではなく教科書体を用いる。どっちつかずのアート字などを書かないですむことにもなる。

(5) 小中学生が語義を理解しやすいようにという考えから、ある種の事物にはさし絵をつけるべきである。う。

これらの基本原則を定めたあと、魏先生は試みに何字かを書いてみて、記述の手本とした。しかしその後、みんなは仕事の関係で、原稿に着手してそれ以上に進めるようなことはなかった。いわゆる「伍記」というのは雲散霧消してしまったのである。

新中国が成立すると、人民教育出版社の葉聖陶先生が魏先生に一冊の字典を責任編集してほしいと要請し、そのための専門組織を立ち上げ、「新華辞書社」と名づけた。辞書社には四五人の編集者がいるだけだったが、魏先生のリードのもと積極的に努力して、『新華字典』初稿を書き上げ、それをガリ版刷りで若干部印刷して関係する先生方に送って意見を徴したのである。最後に、一通り修訂を加え、「新華辞書社」の名義で第一版を刊行した。この第一版は基本的にはすべて「伍記」が定めた原則にのっとり、それを実施に及んだわけである。

一九六二年には『新華字典』にさらなる修訂を加えた。一九六五年さらに修訂し重版したが、字体は前代のような明朝体に差し替え、元來教科書体を使った意図とは異なることになったが、実際それほど美しいとはいえないと思う。学生がネコを見てトラを描くとすると、筆先では永久に上手く描けないことなるう。さし絵も取り消されたが、もとの意図には合わない。原版のさし絵があまりよくなかったことは確かだ。しかし、何

とか改良するべきであつて、取り下げるべきではない。多くの人がそれでいいと思つていない。だからここでは多くを語る必要はない。

『新華字典』の出版は字典の革新のシンボルであつて、語文教育の発展を推し進めるのに一定の作用があつたことは、人のよく知るところである。しかし、魏先生こそがこの字典の主編者であつて、同時に一字一字の審定者であつた。この字典を醸しはじめてから、編集を完成させ、出版にこぎつけるまでには十年の長きを経たのであり、先生の精力が凝縮されたものであるが、それにもかかわらず、そのことを知る人は決して多くはない。不幸にも魏先生は昨年世を去られた。それは我が国の教育事業の損失である。「伍記」は先生が唱導したものであり、その仕事は先生が行なつたものであり、この物語と事実は記しておかなくてはならないものであるので、そのあらましを略述し、辞書の編集事情に関心のある人のための参考としたい。(一九八三年八月)

右の文中にあるような編纂意図を読むと、先に引いた『中国語学事典』の解題は、残念ながら的外れと言わざるを得ないだろう。

それはともかく、『新華字典』は「伍記」のメンバーの努力だけで誕生したわけではない。『新華字典』にとつては周祖謨の文中に出てくる葉聖陶の役割が甚大であつた。当時、中央人民政府出版総署副署長の職にあつた葉聖陶は、一九五〇年一月に魏建功を社長とする新華辞書社を立ち上げた。さらにその年の一二月、葉聖陶みずから新規に立ち上げられた人民教育出版社の社長に就任した。その機会に新華辞書社は人民教育出版社の直属の組織になり、さらに一九五二年には人民教育出版社辞書編輯室となり、一九五三年の『新華字典』初版、翌年の第二版はともに人民教育出版社刊として世に出たのである。この間の葉聖陶の貢献は人民教育出版社社長としてのそれは言う

までもなく、編集の内容においてもかなりのものがあつた。一九五二年七月一六日の「葉聖陶日記」には小字典編纂の動機を以下のように述べる（二〇一二年二月一八日『中国読書報』「葉聖陶と新華字典」を転載する chinawriter.com のサイトによる）。

近ごろ読み書きを学ぶ風潮が甚だ盛んになり、農民が土地改革をすませたので文字を学びたいと望み、祁建華の速成識字法が推進されて、工場や軍隊でどんどん伝習されている。字を覚えたらおのずと本を読みたくなるが、本を読むには字典が求められる。軍隊ではとりわけ切実で、東北軍では何か小字典が必要だそうで、二十万冊の需要があると言っている。

しかしながら、当時の市場に流通している小型字典は、こうした読者に向けた内容のものではなかつた。葉聖陶が魏建功を責任者として新しい小字典を作ろうとしたのは、そういう時代の要請からであつたのである。そこで新華辞書社を立ち上げて、周祖謨の文中にあるように、一九五二年の夏に『新華字典』初稿を書き上げ、それをガリ版刷りで若干部印刷して関係する先生方に送って意見を徴したのであつたが、評判は決して芳しいものでは無かつたようである。曰く「読者対象が不明確である」、曰く「体例が混乱している」等であつた。最も頭の痛い問題は、新華辞書社には十数人の社員がいたが、魏建功たちはひたすら校閲に時間を取られ、実際に字書原稿が書ける社員はほとんどいなくなつたらしい。この状況には葉聖陶も「完成原稿の完璧を期すのは実に難しい」と嘆いたという。

その後さらに半年をかけて修訂稿ができたのであつたが、それを見た葉聖陶は、この程度の修訂ではまだ世に出

せないと判断した。そこで魏建功は葉聖陶にさらなる助言を求め、もう半年後にやっと完成原稿ができた。その間、葉聖陶は本文を逐一手直しし、魏建功らの作成した検字表の不備を指摘し、やはり魏建功の書いた「凡例」では煩瑣に過ぎ、文意が伝わらないからと書き直しを依頼するなど、神経の配り方が並みだたいではなかった。そうした苦労の後、初版の首序『新華字典』が出たが、葉聖陶は決してそれに満足はしなかった。すぐ翌年に部首配列の第二版『新華字典』が刊行されるのだが、実際は別に一本を編集する余裕がないので、やむなく初版に修正を加えることで妥協したという。ちなみに、前段とこの段は中国のネット百科「百度」の記述によるが、機会があればより実証的に調査し、葉聖陶が理想とした小字典の姿を追求してみたい。

さて、人民教育出版社辞書編輯室は、一九五四年一月には文化出版局の直属となり、ここでまた新華辞書社の名が復活する。さらに一九五六年七月、その新華辞書社が中国科学院語言研究所の所属になる。その後一九七七年には、中国科学院詞典編輯室に改属されるという経過があり、現行の第十一版は中国社会科学院語言研究所編、商務印書館刊となっているのである。

四、文革中の『新華字典』

筆者が第三版の次に入手した『新華字典』は一九七一年六月修訂第一版というものである。これが文化大革命開始後、最初の『新華字典』である。そのころ筆者はすでに大学院生になっていた。濃紺のビニールカバーがつき、辞典用特漉きの用紙を使ったために束の薄いスマートな製本であった（後に、一九七六年第九次印刷の厚紙カバーの精装本も手に入れた）。これを神田の内山書店で入手した一九七二年の五月二七日に、たまたま階上の日中学院で中国語研究会（のち中国語学会）の関東支部例会が開かれており、倉石武四郎先生が日常中国語の難しさを講演

されていたが、『中國語學』一二三号の「資料」「例会」一覽表には当日の倉石先生のお名前がないので、正式な発表者としてではなかったかも知れない)、そのお話を聞きながら、筆者は真新しい『新華字典』をいじくっていた。

この版は筆者がもつとも数多く引いた『新華字典』である。今も手元に残るこの一本を見てみると、ビニールカバーは経年変化でカチカチに変質しており、用紙の角がすっかり丸くなり、最初内側にえぐれていた小口は外側にズンと盛り上がっているうえに、煙草のヤニがべっとりついていていいる。

その程度に引き込んだ版であるが、今からふり返るといかにも文化大革命の政策を反映した内容である。以下にその出版「説明」を訳出する。

我が国のプロレタリアート文化大革命は偉大な勝利を収め、今まさに偉大な社会主義革命と社会主義建設の新たな高波が興起しつつある。広汎な労働者農民兵士といった大衆が、マルクスレーニンの本を読み、毛主席の著作を学習し、さらに階級闘争・生産闘争・科学実験の三大革命運動に参加するにあたって、字典工書に対する需要が相当に差し迫っている。我々がいま『新華字典』（一九六五年修訂重排本）に多少の修訂を加え、出版して試用せしめんとするのは、その急需に応ずるがためである。

今回の修訂では、原則として大々的な改編や新しい増補はおこなわず、その中の反動的で問題の大きな注釈や例文についてのみ手入れを行なった。すなわち、解説を加えなければつきりしないものを取り除いた後に、新しい注釈や例文を加えた。付録の中では、使えないものは削除し、誤ったものは訂正し、増補も加えた。

我々は広汎な労働者農民兵士や革命的幹部や革命的教師学生の皆さんから字典に対して貴重なご意見を出してくれることを心から歓迎し、それを更なる改訂に役立てたいと思う。

当時、これに関しては色々な先生方の論評があった。たとえば、東京外大の輿水優先生が、一九七一年二月一日の中国語学研究会関東支部例会で「新華字典（一九七一年修訂重排本）を見る」という報告をおこない（日付は『中国語学』二二三号参照）、その内容を同じタイトルで『中国語』一九七二年二月号に掲載している。ほかに、当時の大学紀要類のあちこちに一九七一年版の紹介があった。この版は語釈の文言がいかにも文化大革命の政治的状況を反映していて、語学誌のみならず、中国の状況を報告する紙誌には色々な記事が掲載された。そこで取り上げられた語例については、次節「改訂履歴」で触れたい。

ところで、筆者が『新華字典』に深く傾斜することになったのは、『中国語』一九七二年二月号に戸川芳郎先生が書かれた「〈□、旧时称く。〉と〈称〉について」という記事を読んだのがきっかけである。戸川先生の記事は、この年の『中国語』誌上に興味深いやりとりが繰り広げられたのが下敷きになっている。この年の一月号に香坂順一先生が「新語紹介」欄でこの一九七一年版『新華字典』の「看护」を紹介し、その語釈の「旧时称护士」を最初「古くは护士とよんだ」と紹介していたが、八月号では「旧时、护士のことをいっていた」とよむのが正しい」という訂正記事を掲げた。それをめぐり、折敷瀬興先生の投稿やら、読者の反響があって、中国語の構文理解の落とし穴にまつわる話題が繰り広げられたのであった。戸川先生はそれらをふまえて中国語における「呼称のしかた」の種々相を論じられたのである。筆者は学部生のころから『論衡』や『白虎通徳論』などの授業を通じて、戸川先生流の中国語取意の手続きを学ぶことをモットーにしていたから、この記事にも大きく触発された（のちに戸川先生の記事は『稱呼』のもつ意味——漢代を例として——という大きな論文に展開された。『中国における人間性の探求』創文社、一九八三年）。

またその少しあと、戸川先生が一九七四年六月の『中國語學』に「成語のすがた」を書かれ、この版の『新華字典』の植物の記載は古字書の『爾雅』に大変よく似ており、それまでの『辭海』や『國語辭典』をしのぐ精密さだと指摘されたのも、漢代の小学書を専門に研究しようとしていた筆者には刺激的であった。そういえば、まったく同じころ、近藤光男先生について顧炎武や王漁洋らの清詩を学んでいたときに、しばしば『新華字典』をめくる筆者にむかって、近藤先生が「その字書にはなかなかいい訓が出てくるそうですね」とおっしゃったことを思い出す。簡体字の『新華字典』と漢文読解の「訓」との思いがけない取り合わせに虚を突かれた思いであったが、近藤先生が常時携帯しておられた『支那文を読む為の漢字典』も筆者の愛用であったから、妙に納得したことであった。

五、改訂履歴

初版の刊行以来ちようど六十年たち、現在の『新華字典』は第十一版である。この機会に以下にはこの間のエピソードを画する改訂をメモしておきたい。なお第×版の下に○印をつけたのは、筆者の手元にある版である。

◎人民教育出版社刊行

一九五三年十月初版

この稿を書いている二〇一二年春に中国の古書店サイト「孔夫子旧書網」にまるで刊行時のような状態の初版が出ており、価格は三千元、邦貨三万六千円ほど。さすがに手が出ない。

一九五四年第二版

◎商務印書館刊行

一九五七年六月商務新一版

一九五九年五月第二版

一九六二年七月第三版○

この版は17次印刷の平装本と19次印刷の精装本とが手元にある。

一九六五年第四版

この版は当時の日本ではほとんど入手できなかったらしい(前掲興水優『新華字典(一九七一年修訂重排本)を見る』)。また、一九七九年の第五版が出たときに、第四版として扱われたのはこの一九六五年版ではなく次の一九七一年修訂第一版であった。従って、この一九六五年第四版はいわばまぼろしの『新華字典』である。

一九七一年六月修訂第一版○

これが先に紹介した文革中の版である。筆者はこれ以後の修訂本はすべて買い求めて手元において来た。この版の奥付には「修訂第一版」と表示しており、第五版と言っていない。それどころか、次の一九七九年第五版の奥付を見ると、この「修訂第一版」が第四版として扱われている。後で書くように文革中特有の語釈に特徴があり、『毛主席語録』からの例文採用が四六条あるという(ネット百科「百度」による)。この版は日本語訳がある。香坂順一・宮田一郎『新華字典』日本語版(光生館・一九七四年十一月)。筆者も求めたが、中辞典は中国語を中国語の語釈で読むのが妙味なのでほとんど参照しなかった。

一九七九年十二月第五版○

一九七八年十二月の中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議(十一期三中全会)において文化大革命の終焉が確認されてからの修訂である。これを第五版とし、文革中の修訂第一版を第四版と位置づけた。文革からすべての歴史がはじまるといって行き過ぎた印象を修正するかのようである。また、まだ不十分ではあるが、

例文に見られた毛沢東を軽減した跡がうかがえる。たとえば【疆】の例文に「敬祝毛主席万寿无疆！」とあったのが、第五版以降は単に「万寿无疆」とあるだけである。逆に、「人民公社」「总路线」など、当時の政治上のキーワードが新たに採録されている（ただしこの版だけで消えた）。これもすぐに日本語版が出た。香坂順一・宮田一郎『新華字典』日本語版・修訂版（光生館・一九八〇年一月）。

一九八七年十二月第六版〇

『新華字典』の語学的な内容の修訂という点ではこの版が画期的であった。一九八四年に國務院が公布した「法定計量單位」で度量衡関連語を、一九八五年の「普通話異読詞審音表」で発音を、一九八六年の「簡化字総表」で字形をそれぞれ調整した。

なかでも「普通話異読詞審音表」による異読の整理は影響が小さくない。この表を検討して公布した機関は、国家語言文字工作委员会と国家教育委員会と廣播電視部（ラジオテレビ省）であった。

たとえば【往】について言えば、第五版では、動詞「ゆく」の場合は第三声、介詞「〜へ」の場合は第四声であったが、第六版では介詞「〜へ」のときも第三声で読むことに変わっている（表ではこの異読統一措置を「統読」と称する）。この結果、中国語教科書の注音表記を書き換える必要が生じたのである。ただし、こうした異読の統読は、やはり『新華字典』が規範性を尊重するがゆえの措置であり、歴史性を尊重する大型の『漢語大字典』や『漢語大詞典』では介詞の第四声を排除しない。

右のような事情があつてか、一々は紹介しないが、この版が出たときも大学の紀要類には色々な紹介や論評が載った。

なおこの版は中国商務印書館版のほかに日本の東方書店製作版があつた。一九八八年九月、定価二二〇〇円

で発売された。印刷製本は日本の凸版印刷株式会社による。ただし、すべてが中国語のままではなく、巻頭の「説明」三頁分が日本語に訳出されている。さらに、巻末「付録」の①漢語拼音方案の説明部分、②常用標点符号用法一覧の用法説明部分と附注、③中国歴代王朝西曆対照一覧の附注、④中国少数民族一覧の二行ほどの前書き、⑤世界各国「地区」首都一覧のカタカナ表記追記と「注釈」、⑥計量単位一覧は中国語のみ、⑦節気表の「西曆の月日による」という説明文、⑧簡化字総表検字の冒頭「説明」と末尾の「注釈」、⑨「中国の省・自治区簡稱と別稱」というタイトル、これらが日本語化されている。⑧⑨は東方書店版独自の内容だそう
だ。

当時の公告によると、日本ではこの東方書店版のみを販売し、商務印書館版は取り扱わない由であったが、実際には両方とも入手できた。ビニール表紙で箱入りの東方書店版は、確かに商務印書館版よりは堅牢で使い勝手がよかった。しかし、大陸の香りに欠けるのも事実で、筆者の手元の第六版は商務印書館版のほうが手あかで汚れている。

一九九〇年二月第七版〇

この版は第六版にくらべてそれほど大きな修訂はなかった。しかし、最後の活版印刷バージョンであり、まだ社会主義の色の残る語釈がかえって懐かしい気がする。

一九九二年七月第八版〇

従来の活版印刷ではなく写植印刷になった。文字の印刷からも分かるが、さし絵、たとえば【**头**】に每版使われている人面イラストを見るとよく分かる。第七版までは歴然と凸版印刷による版面のような絵であったが、第八版からは陰影ないしは立体感の感じられない線画になっている。

毛沢東関連例文の差し替えもその進行度を増し、たとえば第七版までは【呼】の項目に「①喊…高呼毛主席万岁！」とあったのが、第八版以降は「高呼万岁」とあるのみである。また、この版ではどうとう（「社会主义」という見出しと語釈がなくなり、「社会」の語例として「社会主义くく」とあるだけで、その説明は一切なくなった。

この年の夏に鄧小平のいわゆる南巡講話があつて、社会経済が大きく変動するさなかにあつた。筆者はちやうど南巡講話直後に在外研究で杭州におり、変わりつつある空気を肌で感じていた。

一九九八年五月第九版〇

後述するように、この時代になると、かつての社会主義用語の記述がかなり変わってきている。これも日本の東方書店製作版がある（二〇〇〇年二月刊、一八九〇円）。これに関しては、商務印書館の折れやすい紙表紙よりも格段に使いやすいので、もっぱらこれを愛用するようになった。

二〇〇四年一月第十版〇

もはや、ほとんど社会主義の香の感じられないバージョンである。社会やイデオロギーに関わる語彙は姿をひそめ、かわりに情報社会や市場経済に関連する用語の解説がどんと増えたのである。たとえば、「光盘（CD）・互联网（インターネット）・黑客（ハッカー）・软件（ソフトウェア）・硬件（ハードウェア）・艾滋病（エイズ）・克隆（クローン）・基因（遺伝子）・期货交易（先物取引）・盗版（海賊版）・审计（財務監査）・公示（公示）・互动（相互交流）・白领（ホワイトカラー）・蓝领（ブルーカラー）・社区（コミュニティー）・理念（理念）」などである。この版についても、日本語訳『新華字典』ができた。宮田一郎編訳『新華字典』第十版日本語版（光生館、二〇〇五年六月）。

二〇一一年六月第十一版（最新版）〇

これについては、東方書店のネット上の広告を転載させていただこう。

『新華字典』は一九五三年の初版以来、これまでに累計四億冊以上を販売した、中国でもっとも権威ある小型中国語字典。国家語文規範／標準修訂に従い、単字一三〇〇〇余字（繁体字・異体字含む）を収録。また、解説中に三三〇〇余語の単語・多音節語を収録する。旧版発売以来の時代の変化を反映し、一部の用例・発音・単語などを削除あるいは追加している。第十版に比べ、人名・地名・科学用語に用いられる八〇〇余字が増加。また最新の研究成果を反映し、繁体字一五〇〇余字、異体字五〇〇余字を新たに収録している。本書と同内容で青色の見出し字、ビニール装の表紙を採用した「双色版」もあり。

筆者は右の公告の最後にあるビニール表紙の「双色版」を手元に置いている。

さて最後に、これまで色々な識者が取り上げてきた「階級」の語釈の変遷を見ておきたい。

一九六二年七月第三版

「ある社会の生産の中で異なる地位にいる社会集団を「階級」という。生産手段を占有し、ほかの人々の労働の成果を搾取する社会集団を「搾取階級」という。生産手段を持たず、あるいは少量の生産手段を占有し、生産手段を占有する集団のために労働を余儀なくされるのが「被搾取階級」である」

一九七一年修訂第一版

右の語釈に続けて、「社会主義社会にあつて生産手段所有制の社会主義改造が基本的に完成した後にも、階級や階級矛盾や階級闘争が存在する」という毛沢東思想を前面に押し出した文言が加わり注目された。

一九八七年十二月第六版

前の修訂第一版で追加した「社会主義社会にあつて……」以降が削除され、まったく第三版に戻った。
一九九八年五月第九版

「人々がある社会の生産体系のなかで所属する地位の違いや生産手段に対する関係の違いによつて分かれた集団を指す」

もはや脱イデオロギーと言つてよいかと思う。次の第十版も同じである。

そして現行二〇一一年六月第十一版には、この「階級」という項目が消えてしまった（話題になった「看护」も同様）。まったく、隔世の感と言つるのはこのことかと思う。

追記

文中に『新華辞典』の初版が「孔夫子旧書網」に出ているけれどあまりに高価で手が出ない旨のことを書いたが、成稿後、中国での講演料を充てて購入することができた。

（さとうすすむ・二松學舎大学教授）